

## 走れ

岐阜高校 2年 川崎 夏実

見事な青だ。雲の白なんてない。白いのは吐き出した私の息くらい。

快晴ではあるが、十二月、季節は冬。張り詰めた空気が肌に刺さる。

そんな空気を押しつけ、私は走っていた。後ろからも足音が聞こえる。一定のリズム。外の気温と反比例に体が熱い。枯れた木々の間を駆ける。私の息が後ろへ流れていく。それにしても、ぴったりくっつく後ろの足音が気になる。こいつ、最後に私を抜かす気じゃないの。冬の弱い太陽に汗をかく。ああ、私なんて走ってるんだらう——。

普段私は帰宅部で、部活をするなんて面倒くさいと思ってる。家でごろごろする方が楽。だけどもある日、駅伝の人数が足りないから出ないかって友達の梨佳が誘ってきた。私は梨佳の必死さに負けて、とうとう引き受けてしまった。

半分くらいは走ったと思う。私が走るのとは三キロ。なんだかこの辺りって一番心が折れそうになる。止まっちゃいたい。でも後ろから聞こえるもう一つのリズムが私を阻んでいる。しかも私はアンカーなのだ。散々駄々をこねたが変えてはもらえなかった。さすがにプレッシャーがある。でも止まっちゃいたい。その思いが脳を占めていく。それと後ろから迫る足音と息。

綺麗な空だ。冬の空気は乾いているけど、嫌いじゃない。それに横にずっと長く伸びる木々も、枯葉をつけてはいるけど風情があるように思う。こんな風に景色に注目したのも久しぶりかもしれない。

けど、後ろの地面を蹴る音で我に帰る。どうも気にかかるな。抜かされたら、と思うと不安な風が私の心を揺らす。

「大丈夫よ、落ち着いてね。ゴールで待ってるからね。」

急に梨佳の言葉が脳裏に蘇った。襷をもらう時に言ってくれた言葉。そうよね、大丈夫大丈夫。梨佳の言葉を反復する。まだ足はしっかりしてるし、ここまで愚痴を言いながらも一ヶ月位練習してきたんだから。

「頑張れ！あと一キロ！」

応援の音が嬉しい。なんだか体とリズムが一つになった感じ。でも、後ろの足音にも同じように応援の音が響いているらしい。

：今まで皆頑張ってたし、ここで抜かされて私のせいにされたら嫌だな。きつと、最後の二百メートル辺りからかな、勝負は。

私は空を見上げる。

走っていると、なんだか無心になる瞬間がある。きついけど、なんだか空や風と一体化したように思う時がある。何も聞こえないような感じで、ただ体にまかせて走って。何かに一生懸命になる事を面倒臭いと遠ざけていたけど、そんな事はなかったのかもしれない。

着実にゴールは近づいてくる。心なしか後ろの足音の緊張も段々増してる気がする。私の息。体の熱。一定の足音。

あれ、私ってなんで走ってるんだろう。私が抜かされたくないのって責められたくないからだっけ。

ユニフォームが汗で体に張り付く。襷の重みが増す。太陽の光が私の体を突き刺す。私は思い出す。最初はしぶしぶだったけど、練習はきつなくてもタイムが少しずつあがって嬉しかった。私はこの一ヶ月間楽しかった。

私、違う。責められるとかそんなんじゃないやなくて、私なりに頑張ったから、皆で支えあったから、諦めたくないって思ってる。私、負けたくないって思ってるんだ。

その時、後ろの足音に力が込もった。

私も力を込める。

きつい。息が荒い。あと多分二百メートル位のはず。私の周りから雑音が消えていく。景色が流れていく。あと少し、少しなのよ、あんたもう少しスピード緩めなさいよ。ぴたりくっついてくる足音。歩幅もリズムも揃ってる。どんでん返しが怖い。

「ファイト！」

一切の雑踏が消えた中、梨佳の音が聞こえた。ああそっか、私、この皆で繋いだ襷を

持つてる限り諦められない。

ゴールが見えた。後ろの足音が早まる。私達は並ぶ。

あと五十メートル。限界は超えてる。でも私を突き動かすものがある。四十、三十、二十一。

一步。あと一步。一步だけで良い、あんたより先にゴールする。重くなった足を、力を込めて進める。一定のリズムを超える。

時間が、止まったと思った。

「やったあああ！」

気付けば梨佳に抱きしめられ、ゴールに倒れこんでいた。青い空がぼやけて見えた。

私、走り抜けたんだ。一步先を、境界線を越えたんだ。

「…痛いって、梨佳。」

一筋の風が、私たちの間を柔らかく吹き抜けていった。